慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一七世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督と祈願式：『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書
Sub Title	Ottoman governors and collective invocations in the early seventeenth-century Cairo
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2019
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.88, No.2 (2019. 4) ,p.1(165)- 22(186)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20190400-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一七世紀初頭のオスマン朝エジプト州総督と祈願式
――『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書――

長谷部　史彦

序

ドイツ連邦共和国テューリンゲン自由州のエアフルト大学ゴータ研究図書館が所蔵する『諸時代の事件についての同胞たちの喜悦と友人たちの平路』[1]（以下、『マバーヒジュ』）は、オスマン朝エジプト州の一六世紀末から一七世紀初頭にかけての動乱期に関する最重要のアラビア語年代記史料の、おそらくは唯一の稿本であるにもかかわらず、何故かこれまで研究者たちの視界の外に放置され、利用されることがなかった[2]。著者のイブン・アジャミー Shihāb al-Dīn Aḥmad b. Aḥmad b. ʿAbd al-Raḥmān b. al-ʿAjamī はスンナ派のイスラーム諸学を修めたアーリム（学者）であったが、州都カイロやギザ県、ナイルデルタ北辺の地中海都市のブルッルス港などを活動舞台に、専ら計量士（qabbānī）として働くことで日々の生計を立てながら、三〇八葉に及ぶこの大部な史書、さらには未完の続篇（八四葉）を書き残した[3]。いずれも著者の自筆稿本とみられるこの『マバーヒジュ』とその続篇は、欄外の夥しい追記、本文の所々にみられる訂正、構成上の不規則性などによって読み手に再整理や清書の必要を感じさせる、いささか混沌とした草稿的な外観を呈している。しかしながら、当該期の大都市カイロを中心としたエジプト社会の諸側面に関して、本史料が細かな独自情報を膨大に供する、他に類をみない第一級の史料であることは疑い得ない。とりわけ、商品の計量を生業としたこの歴史家が、州都カイロを中心とした市場経済の「参与観察者」として綴った諸々の記述は、当該期エジプトの社会経済史研究にとって極めて高い価値を有し

ているといえよう。(4)

『マバーヒジュ』は大きく分けて、①緒言、②歴代エジプト州総督の治績と建設事業、③ナイル川の増水や著者の身辺情報など、④エジプトの聖者たちの死亡記事、⑤著者と交流のあったシャイフたちの伝記、⑥ヒジュラ暦一〇〇〇年／西暦一五九一年から一〇一六年／一六〇八年に至る年代記から成るが、⑥が分量的に全体の八割近くにも達し、特に最後のヒジュラ暦一〇一六年の記事は詳細を極め、全体の約二七％を占めている。そして、続篇は、一〇一七年／一六〇八年から一〇一九年第三月／一六一〇年六月に至る年代記のみで構成されている。『マバーヒジュ』と続篇の年代記記事には、他の同時代年代記と比較した際に質量ともに別格の社会史諸情報が内包されているのである。

本稿は、これまで論じられたことのないエジプト州総督による祈願式の主催という歴史事象に的を絞る。エジプト州総督に関する従来の研究についていえば、支配組織における位置・役割の検討や狭義の政治史的考察(5)とは構えを異にして、エジプト州総督の州都における諸活動や振る舞い、州総督による州都の社会・空間支配の問題について検討しているのがウィンターとベーレンス＝アブーセイフであり、注目に値する。(6)とりわけ後者は州総督の着任時の行進について詳述し、マムルーク朝期からフランス占領期にまで至る継続性を指摘した点で示唆に富むといえよう。

以下では、『マバーヒジュ』とその続篇にみられるオスマン朝エジプト州総督主催の祈願式に関する年代記記事に照準を合わせる。こうした祈願式の事例は、管見の限り当該期を扱う他のアラビア語年代記諸史料に確認することができない。エジプト州総督による支配の政治文化的な性格を多面的に解明することを大目標として、これまで注目されたことのない一七世紀初頭の「官制祈願式」の具体相を可能な限り明らかにし、州都カイロの空間・社会・宗教文化におけるその特徴や意味について考察を試みることにしたい。

一　アリー・パシャとモカッタム山

『マバーヒジュ』とその続篇には、オスマン朝エジプト州総督主催の祈願式の具体的事例が八つ確認される（四―五頁の表を参照）。著者イブン・アジャミーはそれらについて貴重な記述を残しているが、実際に彼が式の場に身を置いていたことを明証するような記述はみられ

ない。以下、三章に分け、この八例について当時の時代状況などを含めその詳細を再構成し、内容的な検討を加える。

一七世紀初頭に至る歴代エジプト州総督の事績を要説した『マバーヒジュ』篇首の記事によれば、アリー・パシャ・Alī Bāshā al-Silaḥdār は一〇一〇年第二月一九日／一六〇一年八月一九日に同職に就任し、一〇一二年第四月六日／一六〇三年九月一三日までの二年余、カイロ城内の州総督府で治政を担った[7]。着任に先立つヒジュラ暦一〇一〇年の初頭、すなわち一六〇一年七―八月には、カイロで米、レンズ豆、エンドウ豆、バター油、胡麻油、南瓜、茄子、モロヘイヤなど諸物価の高騰が問題となっていた[8]。また、同年第三月／一六〇一年八―九月にはカーヒラで食肉の価格が高騰し、羊肉の供給量が不足して、『マバーヒジュ』によれば「その人はズフーマ門 Bāb al-Zuhūma からトゥールーン・モスク地区 Khuṭṭ Jāmiʿ Ṭūlūn まで歩いたが、店先に吊るされた肉を目にすることはなかった[9]」という。しかし、小麦についていえば市場流通量は多く、一イルダッブ当たり七八ニスフであったものが六〇ニスフへと値下がりした[10]。翌第四月／一六〇一年九―一〇月、この年のナイル川の最高値は一九ズィラーウ七イスバウに終わった。イブン・アジャミーによれば、「非常に低水位のナイル（Nīl khasīs）であった」ので、エジプトクローバー（barsīm）、米、発酵乳穀物製品のキシュク（kishk）、レンズ豆、エンドウ豆、炒り青小麦（farīk）、バター油、胡麻油、各種の野菜など諸物価が高騰した[11]。

こうしたなか、着任から約二か月後の一〇一〇年第四月二二日金曜日／一六〇一年一〇月二〇日、アリー・パシャはカイロ城を下り、モカッタム山に登り、彼の布告に応じて参集したカーヒラの学者たち（ʿulamāʾ）、スーフィーの導師たち（mashāʾikh）、「篤信の人々」（ahl al-ṣalāḥ）と共に、降雨（nuzūl al-ghayth）と物価の低下を目的として、ジュユーシー・モスク Masjid al-Juyūshī の近くで唯一神アッラーへの祈願を行なった（表中の No. 2、以下、同様に表中の番号のみを示す）[12]。大稔哲也の研究によれば、モカッタム山の集団祈願の場としての利用は、少なくともトゥールーン朝期の八八四年にまで遡ることができ、オスマン朝期に入っても、一五五三年／一五五四年に著名なスーフィー聖者・学者のシャアラーニー（一五六五年歿）をはじめとしたウラマーがモカッタムでの集団祈願への参加を要請されたことがシャ

祈願の目的	主な参加者	典拠
ペスト退散、物価の低下	学者、法学者、聖者、児童の教師、善行と篤信の人々	*Mabāhij al-ikhwān*, 111r.
降雨、物価の低下	州総督、学者、スーフィー導師、篤信の人々	*Mabāhij al-ikhwān*, 72v–73r.
降雨	州総督、学者、スーフィー導師、善行と篤信の人々	*Mabāhij al-ikhwān*, 74r.
不明	学者、法学者、スーフィー導師、篤信の人々	*Mabāhij al-ikhwān*, 75v.
降雨	学者、善行と篤信の人々	*Mabāhij al-ikhwān*, 153r–153v.
戦勝	学者、法学者、善行と篤信の人々	*Mabāhij al-ikhwān*, 188v.
戦勝、物価の低下、降雨	学者、児童の教師、善行と篤信の人々、軍司令官	*Mabāhij al-ikhwān*, 189r.
ナイルの増水	学者、シャリーフ、児童と教師、善行の人々、トルコ系軍人	*Dhayl mabāhij al-ikhwān*, 52v–53r.

アラーニー自身の著作に記されているという[13]。つまり、本事例は、シャアラーニーらも参加を求められた集団祈願から五〇年近く経った後にも、モカッタム山がこうした場として活用されていた事実を明示するものといえよう。また、前記の「篤信の人々」という表現に関していえば、そこに「生ける聖者」が含まれていたかもしれないという点にも留意が必要である。さらに『マバーヒジュ』によれば、この祈願式に先立って一時的に「コーヒー（qahwa）を売る場所」が閉鎖されたという[14]。イスタンブルを中心としたオスマン朝社会では、一七世紀前半になってもコーヒー飲用をめぐる法学論争や政権による禁止への動きが未だ決着をみていなかった[15]。ここでの閉鎖令は、祈願に応じて唯一神が回答として与える恩寵を得る可能性を高めようとして、州都社会の全体に斎戒の姿勢を顕示することを求めた施策であると解釈されよう。

アリー・パシャはモカッタムから下山すると直ちにカイロの南の河港フスタートへと騎行し、シュワン・スルターニーヤ（shuwan sulṭāniyya、スルタンの穀倉群）で貯蔵穀物を視察した。その後、彼は川船に乗ってナイル西岸へと渡り、ブーラーク・タクルール Būlāq al-

表　17 世紀初頭カイロにおけるエジプト州総督主催の祈願式

No.	開催日	主催者	開催地
1	1601 年 9–10 月	アリー・パシャ	シャーフィイー廟近くの礼拝所
2	1601 年 10 月 20 日	アリー・パシャ	モカッタム山のジュユーシー・モスク
3	1601 年 11 月 9 日	アリー・パシャ	モカッタム山
4	1601 年 10–11 月	アリー・パシャ	シャーフィイー廟近くの礼拝所
5	1605 年 1 月 7 日	ハドゥム・メフメト・パシャ	シャーフィイー廟近くの礼拝所
6	1606 年 7 月 24 日	ハサン・パシャ	モカッタム山
7	1606 年 7 月 28 日	ハサン・パシャ	シャーフィイー廟近くの礼拝所
8	1609 年 8 月 28 日	クル・クラン・メフメト・パシャ	シャーフィイー廟近くの礼拝所

※ No. 2 と No. 3 の間にもモカッタム山でアリー・パシャ主催の祈願式があったが、詳細は不明である。

Takrūr やエンバーバ Imbāba にまで足を延ばしたが、イブン・アジャミーによれば、それはその地に貯蔵されていた小麦を視察するためであったという[16]。祈願式に引き続いて行われた、エジプト州の財政・徴税システムにおける重要拠点施設とその補助施設を対象としたこの一連の視察の意図について、『マバーヒジュ』には説明がない。しかし、州都の穀物供給・価格をめぐる施策との関わりも窺わせる州総督の行動ということはできるだろう。

その後、同年の第五月一三日／一六〇一年一一月九日にもアリー・パシャは騎行してモカッタム山に登り、自らの布告で集めた学者たち、スーフィーの導師たち、そして「善行と篤信の人々（ahl al-khayr wa al-ṣalāḥ）」の集団と共に、そこで祈願式を挙行した（No. 3）。『マバーヒジュ』の記事にはさらに、

しかし、それには何の効果も無かった。そしてこれが三回目に当たったのだが、アッラーは斯様な慣行において人々に雨（maṭar）を控え給うたのである。とある[17]。つまり、それはアリー・パシャがモカッタム山上で主催した三度目の祈願式だったのである。

ところで、ここでの引用記事でも先の祈願式と同様に

「雨」と明記されている点については、少々不可解といわねばならない。地中海沿岸の一部地域を除きエジプトは総じて降雨量が極めて少なく、基本的に天水農業地帯ではなく、また飲用などの生活用水の供給源も主にナイル川であったからである[18]。前述のとおりこの年のナイル川は低水位の傾向を示したため、ここでの「雨」が増水を引き起こすナイル上流域における降雨を指すという解釈が一応成り立つと考えられる。しかし、この点については、本稿第三章において別の事例を検討する際に再論することにしたい。

二　アリー・パシャによる礼拝所の新設と活用

『マバーヒジュ』によれば、この頃、アリー・パシャは、カイロ南部の広大な墓地の一部を成す小カラーファ Qarāfa Sughrā に位置する、シャーフィイー廟 Qubbat al-Imām al-Shāfiʿī に面した丘の西側に貯水池（sihrīj）を掘るよう命じた[19]。貯水池が完成すると水が張られ、そこに配置された給水の世話係（khādim）には毎月の手当が与えられた。さらにアリー・パシャは、その傍らに大きな礼拝所（muṣallā）を建設するよう命じ、そこに説教壇を据えた[20]。イブン・アジャミーはその意図について次のように記している。

> この礼拝所は、価格の低下と降雨についての祈願（duʿā）のために人々を集めることを目的として建造された。しかし、それは全く有効ではなかったのである[21]。

このようにイブン・アジャミーはアリー・パシャの祈願の場の新設事業の有効性について疑念を表明しているが、この新設の礼拝所（祈禱所）は州都の祈願式の場として以後活用されることになる。

その最初の利用は同年第四月／一六〇一年九―一〇月のことであり、それについて『マバーヒジュ』には、

> 同月、学者たち、法学者たち、児童の教師たち（muʾaddibūn）、善行と篤信の人々、聖者たち（muʾtaqadūn）は祈願のためカラーファのシャーフィイー廟近くの丘の上に彼（アリー・パシャ）が建てた祈願所へ行くように、という布告の公表に関するアリー・パシャの命令が示された[22]。

と述べられている。

この祈願式に「児童の教師たち」、つまりマクタブ（クルアーン学校）の教師と「聖者たち」も参加した点にまず注意を払っておきたい[23]。さらに、これに続く記述

で注目されるのが、礼拝所の形状について、それが「大きなマスタバ（mastaba kabira）」であったとされている点である[24]。ここでのマスタバはカイロのスークの店先に設置されていたような「台座」ではなく、「大規模な台状構築物」とみるべきであろう。つまり、シャーフィイー廟近くに新設されたこの礼拝所の形態は、地面より一段高い、おそらくは石造りの大平面の上に説教壇が一つ据えられた、覆いの屋根をもたないイスラーム宗教施設であったと推察されるのである[25]。

翌朝、布告に応じた人々がこの礼拝所に参集すると、シャイフのザイヌルアービディーン・バクリー Zayn al-ʿĀbidīn al-Bakrī が先頭に立って説教壇の上で唯一神への祈願を行ない、その後、正午前に参加者たちは帰路に着いた[26]（No. 1）。近世エジプトの有力スーフィー教団バクリーヤの長であったザイヌルアービディーンが、この祈願式において先導的役割を担ったことも注目される[27]。イブン・アジャミーは、このような祈願式が催された理由を「大流行のペストと物価高の除去（raf al-ṭāʿūn wa al-ghalāʾ）」であるとしている。そして、彼は「それは何の役にも立たなかったが、ついには至高なるアッラーがその双方、すなわちペストと物価高の除去を欲し給うたのである。」と記し[28]、この州総督主催の祈願式そのものについては、またもやその実効性を疑問視しているのである。

『マバーヒジュ』には、この翌月の第五月／一六〇一年一〇―一一月に同礼拝所を舞台に同様の祈願式が開催されたことが記されており、その記述内容はかなりの点で相似的である（No. 4）。主な相違点を列挙するならば、この第五月の祈願式については、①礼拝所に参集した人々を「学者たち、法学者たち、スーフィーの導師たち、篤信の人々の一団」としていること、②「コーヒーを売る場所が日の出から人々が帰路に着くまで閉鎖された」と記されていること、③祈願の理由に関する言及が無いこと、そして、④前述のバクリーが先頭に立って祈願したことに関して、

説教壇に上り、サジュウ（押印散文）調の祈願（duʿāʾ musajjaʿ）を行なったのは、シャイフ・ザイヌルアービディーン・バクリー Zayn al-ʿĀbidīn al-Bakrī al-Ṣiddīqī であった。そこで彼が祈願を行なうと同時に、人々は彼の祈願に「アーメン（かくあらせ給え）」といった。

と記されている点である[29]。

第五月の集団祈願と異なり、先述のように第四月のそれについては祈願の目的が明記されているのだが、それが物価高とペスト流行の除去とされていることについては、やや奇妙との印象を抱かざるを得ない。というのは、『マバーヒジュ』に次のような記述があるからである。

同月（一〇一〇年第九月／一六〇二年二―三月）、高貴なる両聖地の穀物（ghilāl al-Ḥaramayn al-sharīfayn）をスエズ港へと運搬していたアラブ部族民（ʿurbān）の一団が、エジプトとその周辺で発生した、当該期に同様の例を耳にしたことのない疫病（wabāʾ）への懼れから逃亡した。私が得た情報では、流行の始まりは、ルーム地方からもたらされた後のことで、この年の第七月（一六〇一年一二月―一六〇二年一月）、ナイルデルタでのことであった。それから第九月（一六〇二年二―三月）にカーヒラで増大し、第一〇月（一六〇二年三―四月）には少し縮減した。しかし、外来者の上エジプト人たちの多くが死亡し、ついにはパン焼き窯が動きを止め、コーヒーが売られる場所の大部分が閉鎖されたのである。(30)

この伝染病のカタストロフに関する詳述はさらに続くが、そこでは疫病一般を意味する「ワバー（wabāʾ）」に換えて「ペスト（ṭāʿūn）」の語が用いられている。(31)ここで注意したいのは、エジプトにおける初発の地ナイルデルタでの流行開始が一六〇一年末～一六〇二年初頭、カイロでの猖獗が一六〇二年二―三月であったと述べられている点である。つまり、ペスト及び物価高の除去を目的とした祈願式が一六〇一年第九―一〇月にカラーファの新設礼拝所で催されたとする先の記述との間には、時期的な不整合が認められるといえよう。しかし、さらに目を転じて注視したいのは、「前述のペストの流行において死亡した軍司令官たち（umarāʾ）と高位の者たち（akābir）についての記述」と題する『マバーヒジュ』の挿入記事の部分である。(32)同記事中には、カイロを訪問していたメッカのシャリーフ、ガルビーヤ県総督、ダミエッタ港の徴税請負人（multazim thaghr Dimyāṭ）など、この時期のペスト流行で感染死した有力者たちが列挙されているが、このうち著名なハナフィー派法学者のハーヌーティー Sirāj al-Dīn al-Ḥānūtī についてのみ死亡日が明記されている。(33)それは一〇一〇年第四月三日／一六〇一年一〇月一日であり、ペスト退散をその目的の一つとしたとされる前記の祈願式の開催と時期的にほぼ合

致している。このため、エジプトにおける流行の開始月に関する前掲の引用記述の確度の方をむしろ問題視すべきであると思われるのである。[34]

一〇一二年第三月一二日／一六〇三年八月二〇日（コプト暦ミスラー月一七日）、ナイル川の満水とミスル運河開きの恒例行事がフスタートで開催されたが、アリー・パシャはこれに参加しなかった。この不参加についてイブン・アジャミーは、エジプト州総督としては前代未聞と指摘している。しかし、その前夜に、アリー・パシャは前述のカラーファの礼拝所で預言者ムハンマドの生誕を祝う会を主催していた。彼はクルアーン読誦者たちを出席させ、一群の貧者たち（fuqarā）にディーナール金貨を一枚ずつ施した。そして朝になると、参加者たちはアリー・パシャのために唯一神に祈願したという。[35] つまり、アリー・パシャは預言者生誕祭の方をより重視し、自らが建設した聖廟地区の礼拝所におけるその祝いの場において、信仰に篤いムスリムの為政者であることを充分に表現していたのである。ゆえにこの州総督は、重要なナイルの伝統行事への恒例の参加を不要と考えたのではないだろうか。そして、彼が任期を終えての帝都イスタンブルへの帰還の準備に忙しかったということも一因であろう。その翌月の同年第四月七日／一六〇三年九月一四日にアリー・パシャは二年分の中央納金（khazīna）を携えてカイロ城を後にし、陸路帝都へと旅立ったのである。[36] このように赴任先の社会に篤信を印象付けたアリー・パシャであり、『マバーヒジュ』にはその任期中にカイロ市内の酒店が閉鎖されていたとの記述もみられる。[37]

三　後続のエジプト州総督たちと祈願式

アリー・パシャの後任の州総督は、スーフィーとしての活動履歴をもつイブラーヒーム・パシャ Ibrāhīm Bāshā al-Ṣūfī であった。[38] 彼は一〇一二年第一二月末日／一六〇四年五月二九日に着任したが、[39] その僅か四ヶ月後の一〇一三年第四月二九日／一六〇四年九月二四日、カイロ北郊のカナーティル・ムナッジャー灌漑土手 Jisr Qanāṭir Munajjā 近くのマフムート・パシャ宮 Qaṣr Maḥmūd Bāshā において軍隊（jund）の反乱勢力に急襲され、殺害された。[40] 正規軍の一部による現役の州総督の殺害というこの衝撃的事件の後、エジプト州の主席カーディーであったムスタファ・エフェンディ Muṣṭafā Afandī b. ʿAzmī が州総督臨時代理（qāʾim maqām）と

して治政に当たった時期を挟んで、一〇一三年第七月二八日／一六〇四年一二月二〇日、宦官のハドゥム・メフメト・パシャ Muḥammad Bāshā al-Ṭawāshī がエジプト州総督に着任した。その在任期間は短く、一〇一四年第三月一日／一六〇五年七月一七日までの約七か月であった[41]。

一〇一三年第八月一五日／一六〇五年一月六日、ハドゥム・メフメト・パシャは、「人々が水を与えられるように祈願するため」学者たちや「善行と篤信の人々」にアリー・パシャのカラーファの礼拝所に行くよう命じる布告を公示させ、翌日、それは実行に移された[42]（No. 5）。アリー・パシャの創始したカラーファの礼拝所での祈願式の挙行という遣り方が、後任州総督によって踏襲されたのである。イブン・アジャミーはこれについても「それは全く効果が無かった。」と否定的な眼差しを向けているが、ここで注視すべきは「水を与えられるように」との文言である。そしてその意味を解明する上で重要なのが、約二週間後の同年第九月一日／一六〇五年一月二一日の記事である。そこでイブン・アジャミーは次のように記している。

その日、アッラーは雨（maṭar）をもってイスラーム教徒たちをお助けくださった。そのため、人々は通りへと跳び出し、吉兆と恵みに喜びを分かち合った。前述のように冬の初めからそれ（雨）は止められてしまい、カーヒラで水が非常に少なくなり、ついには革水筒一袋分が二ニスフで売られた。そしてこれは、人々が夏期のようにそれを必要とすることのない、厳寒のなかのことであった。［中略］もしこの事態が夏期にあったならば、激しい渇きで人々は全滅したであろう[43]。

つまり、ハドゥム・メフメト・パシャの主催した祈願式は、飲用水が不足した状況に際しての雨乞い集会であったということになる。近世エジプトに関する古気候学研究とのすり合わせも必要となろうが、差し当たっては、カイロの飲用水として時に天水が希求されることもあった、という意外な史実を伝える重要記事として記憶に留めておきたい。

ハドゥム・メフメト・パシャの後を受け、イェメン州総督の職にあったハサン・パシャ Ḥasan Bāshā が一〇一四年第三月一日／一六〇五年七月一七日、エジプト州総督へと転任した[44]。彼が同職を担ったのは、一〇一六年第一月二五日／一六〇七年五月二二日までの約一年一〇か月であった[45]。ハサン・パシャについても祈願式の主催

者となった事例が『マバーヒジュ』に確認される。彼は一〇一五年第三月一七日／一六〇六年七月二三日、「学者たちや法学者たちや善行と篤信の人々」を対象に、モカッタム山に登り、「我らの主人、スルタン・アフメトのために、至高なるアッラーが不信仰者たち（kāfirūn）や罪深き者たち（fāsiqūn）に対する勝利を与えるよう祈願すること」を命じる布告を出させ、翌日それはそのとおりに実行されたという[46]（No. 6）。つまり、モカッタム山におけるこの集団祈願の目的は、北西方面のハプスブルク帝国、東方のシャー・アッバース一世のサファヴィー朝軍、さらには内憂のジェラーリー諸反乱に対するアフメト一世（在位一六〇三―一六一七年）とオスマン朝軍の勝利の祈願であった[47]。スルタンの代理人たるエジプト州総督が聖山モカッタムをオスマン朝の戦勝祈願の場として利用したことは、特段の注目に値しよう。

祈願式の三日後の第三月二一日／一六〇六年七月二七日、再度ハサン・パシャの布告が公示され、「学者たち、善行と篤信の人々、マクタブの児童の教師たち（mu'addibūn al-atfāl bi-al-makātib）、王朝の軍司令官たち（umarā' al-dawla）」にカラーファのアリー・パシャの礼拝所に行き、「我らの主人、スルタン・アフメト一世が不信仰者たちに対して勝利されるように、またイスラーム教徒たちの食料が安くなるように、そして雨（maṭar）がもたらされるように、至高なるアッラーに祈るよう命じた。」という（No. 7）。その翌日に布告に従って何度も集団祈願が行なわれたが、イブン・アジャミーは何の効果もなかったという一文を付加することをここでも忘れていない[48]。

以上のように、祈願式をめぐるアリー・パシャ以来の統治手法をこのハサン・パシャも踏襲し、モカッタム山とカラーファの両方において集団祈願式の開催を主導した。しかし、一六〇六年夏にナイル川の増水が一時的に停止した際には、別の宗教的施策がとられた。同年第四月二一日／一六〇六年八月二六日、満水後にナイルの増水が五日間止まり、住民が小麦を求めてブーラークの河岸に殺到する事態を受けて、ハサン・パシャはカイロのムフタスィブ（市場公益監督官）を解任して自らの従者（tābi'）を同職に据え[49]、他方でカラーファの複数の修道場（zawāyā）とカーヒラの複数の聖廟（aḍriḥa）で羊の犠牲儀礼を挙行するように命じたのである。この市内の複数の小さな聖域における犠牲儀礼の同時的実施の理由について、イブン・アジャミーはナイルの増水停止によ

ると明記している。[50]

ハサン・パシャの後任が周知のクル・クラン・メフメト・パシャ Wazīr Muḥammad Bāshā al-Sāliḥdār（在職一六〇七―一六一一年）である。彼はエジプト州における一六世紀末以来の軍事・政治面の混乱状態を立て直し、「第二のエジプト征服」を成し遂げた強力なエジプト州総督とされてきた。[51]『マバーヒジュ』にはクル・クラン・メフメト・パシャのカイロ到着が一〇一六年第一月二六日／一六〇七年五月二三日、カイロ城の州総督府で州総督の職務を遂行し始めたのが同年第二月七日／一六〇七年六月三日と記されている。彼は一〇二〇年第六月一九日／一六一一年八月二九日に同職から退いたが、その在任期間は四年四ヶ月余に及んだ。[52]

このクル・クラン・メフメト・パシャの任期中にも、カラーファにおける祈願式の事例が確認される（No. 8）。『マバーヒジュ』には以下のように記述されている。

一〇一八年第五月二七日／一六〇九年八月二八日、人々はこの心配事を取り除こうと祈願のために外出した。人々には既にそのことが布告されていた。人々が祈願に向かい帰還するまで、店舗や売場が閉じられたが、それは明け方から真昼までのことであった。そして、学者たち、善行の人々、児童の教師たちの集団が外出した。祈願のための人々の集合は、アリー・パシャがその任期にイマーム・シャーフィイー廟前の西側に設立した礼拝所においてであった。彼はその時代にペスト（ṭāʿūn）が流行した際に、その建設を命じたのである。[53]

引用文中の「この心配事」とは、同年八月にナイル川の夏季の増水が一時的に停止したことを指している。その際、カイロの人々は騒ぎを起こし、不安に駆られて穀物の獲得に奔走した。[54]こうした事態に、祈願式の開催の何日か前に、クル・クラン・メフメト・パシャ自身がその「解決」に向けての宗教的活動を開始していた。この州総督は夜間にカイロ城を下りるとシャムスッディーン・ハナフィー聖廟を訪れ、両頬を敷居に擦り付けてアッラーに祈願し、また「一群のカーヒラの生ける聖者たち（jamāʿa min al-mashāʾikh al-aḥyāʾ al-muʿtaqadīn）」も訪問した（ziāra）。そして聖者たちの一人、ファハーダ池街区 Ḥārat Birkat al-Fahāda に住むムタウワイー Shaykh Ḥusayn al-Mutawwaʿī というシャイフに増水の祈願を要請したという。[55]この州総督が、宗教的意味で効果が期待された「死せる聖者」と「生ける聖者」の双方

に対して働き掛け、問題解決に向けた行動を積極的に展開していた点がまず注目される。

さらに州総督は、「ディーワーンのカーディー（qāḍī al-dīwān）」に八〇〇〇ニスフの銀貨を渡し、カーヒラの複数のマクタブ（makātīb）に分配するように命じた。このカーディーはマクタブを巡回し、教師たちや未成年の生徒たち（ṣibyān）に銀貨を分け与えた。イブン・アジャミーの得た情報では、生徒たちにはそれぞれ二ニスフ、つまり銀貨二枚が施されたという[56]。ナイルの増減水を司る最高主体はアッラーと考えられていたから、唯一神に近しい貧者・弱者への任意の喜捨行為（サダカ）は当時としては至極妥当な宗教・政治的行動であったが、ここで州総督が施しの対象をイスラームの初等教育の場に集中させていた点に注意を払っておきたい[57]。

こうした州総督による聖者たちへの働き掛けとマクタブへのサダカに続いて、先の引用記事の州総督が主催する祈願式が、シャーフィイー廟近くの礼拝所で挙行されたのである。この式を先導した「祈願の説教師（khaṭīb fī al-duʿāʾ）」は、「アルティー・バルマク Alṭī Barmaq」として知られたムハンマドという名のシャイフであった。「アルティー・バルマク」についてイブン・アジャミーは、オスマン語（lugha Turkiyya）で「それぞれの手に指が六本ある人」を意味すると解説している[58]。導師は多指症だったのであろうか。

また、この祈願式には多数のトルコ系軍人たち（arwām）やマクタブの児童たちも参加し、さらに「カーヒラにおけるシャイフの中のシャイフ」でシャリーフであったアフマド・ブン・リファーイー Abū al-ʿAbbās Aḥmad b. al-Rifāʿī も加わって、大変な盛り上がりをみせたという[59]。『マバーヒジュ』の続篇の記述はクル・クラン・メフメト・パシャの任期の途中で突如擱筆に至るが、この有名な州総督による祈願式の主催が確認されるのはこの一例のみである。

結――まとめと考察

以上、一七世紀初頭のエジプト州総督たちが布告によって指示を与え、州都周縁部の聖域で主催した祈願式の諸事例について未活用史料から具体像を再構成し、検討を加えてきた。一六〇一年から一六〇九年までという短期間の八例という限られた考察対象ではあるが、『マバーヒジュ』とその続篇の利用によって初めて把捉し得た諸事例であり、また祈願式の特徴や傾向性に関しても

幾つかの点を鮮明化し得たのではないかと思われる。以下、それらについてまとめておきたい。

まず主催者の州総督と開催地についていえば、ペスト退散を当初の目的として小カラーファのシャーフィイー廟近くに礼拝所を新造し、そこでの多様な目的の祈願集会の祖形を創出したアリー・パシャの「治績」の史的重要性を確認しなければならない。後継のハドゥム・メフメト・パシャ、ハサン・パシャ、クル・クラン・メフメト・パシャは、宗教儀礼を通じた社会的不安の解消という多分に政策的な危機対応の企てにおいて、古来集団祈願の場として利用されてきたモカッタム山と比べて、カイロ城下の中央広場のルマイラ広場からの平坦な行路が整い、住民の参集も容易な小カラーファという聖域の中心部付近に出現した新たな宗教空間を活用する、という手法を踏襲していった。祈願式の場として八例中五例を占める、空を望むこの開放的な礼拝所は、こうした統治の文化的要素の継承を通じて州都の公的な祈願空間として定着してゆくことになったといえよう。ただし、アリー・パシャを含めた州総督たちはそこでの集団祈願に自ら加わろうとはしなかった。その理由は明らかでない。アリー・パシャの祈願式への参加が確認できるのは、モカッタム山での二度の祈願式のみであった。また、ここで取り上げた後継の州総督たちのなかで唯一モカッタム山の祈願式を組織したハサン・パシャもまた、式に臨席しなかったのである。そして、こうした州総督主催の祈願式の効果について多分に懐疑的な著者イブン・アジャミーのオスマン朝やエジプト州政権に対する見方、権力観に関しても今後の考究が必要である。

シャーフィイー廟について付言すれば、ベーレンス＝アブーセイフは一八世紀には州総督の着任行進のコースにシャーフィイー廟参詣が組み込まれていたことに着目し、一七世紀まではそうした慣行はなかったと推察し、またクル・クラン・メフメトなど州総督がシャーフィイー廟を重視する傾向、さらには、具体的な人物名は挙げていないが州総督の埋葬地となっていたことも指摘している(60)。本小論が取り上げたアリー・パシャによる祈願所の設置・活用を含めて、一七世紀のエジプト州総督とこの聖廟の諸関係についての多角的な検討は不可欠といえる。ハナフィー学派重視のオスマン朝のスンナ派体制に鑑みれば、それは、エジプト社会で明らかに優勢なシャーフィイー学派の開祖を尊重する姿勢を明示することの政治的な意義と関わっていたのかもしれない。

次に祈願の目的についていえば、それはペストの退散、物価の低下、戦勝、降雨、ナイル川の増水のように様々であった。社会が危機・難題に直面した際に聖なる場を舞台として行なわれる集団祈願は、唯一神の救済という応答を希求しての宗教実践であり、それに向けて州都の人々を誘導することは、州総督にとって社会危機の管理上「正しい」選択であったといえる。このうち降雨については、灌漑農業の必要条件であったナイルの増水を求める場合と日常の飲用水の確保のための降雨を求める場合の双方が認められたが、さらに時代幅を広げて関連事例を集め、環境史の成果も併せつつ考える必要がある。また、ナイルの増水停止に際しハサン・パシャは羊の犠牲儀礼をもって対応したが、本小論で確認したクル・クラン・メフメト・パシャ主催の増水祈願式も含めて、ナイル川の水位変動への一七世紀の州総督たちの関わりや対処について史料情報を集めて総合的に考察すべきであろう。

祈願式への参加者に関しては、祈願主体に具体的に言及するかたちの布告であった点がまず注目される。「善行と篤信の人々」という表現は「全ての善きイスラーム教徒たち」を指すともいえようが、とりわけ学者・スーフィー導師・「生ける聖者」・シャリーフなど、社会の中でより強く宗教性を帯びた人々の参加を主催者側が求めていたことは明白である。それは、唯一神の応答を引き出す彼らの「実効力」が期待されたからでもあろう。このうち学者がしばしば筆頭に挙げられていることについては、書き手のイブン・アジャミーが学者だったことも関係しているかもしれない。他方、軍司令官やトルコ系軍人の参列は祈願式の政策性を考慮すれば意外とはいえまい。刮目すべきはクルアーン学校の教師や児童の動員であろう。中世・近世のカイロにおける給水所とクルアーン学校の複合施設（サビール・マクタブ）の増殖が示すように、イスラームの根本啓典の児童への教育は、ワクフ（永続的サダカ）を含むサダカの対象として重要視されていた。マクタブの教師と生徒は、こうした支援によって、アッラーが下したアラビア語の啓示の言葉に日々触れ続ける者たちであった。祈願式への動員は、彼ら初等学校の師弟たちが学者・スーフィー・聖者らと同様に、唯一神への志向性が特段に強く、恩寵が与えられやすい人々、と目されていたことよるのではなかろうか。

本稿で取り上げた時期の前代について年代記史料から関連情報を引き出すことは困難といわざるを得ないが、

有用なアラビア語の年代記史料の数が増える一七世紀中葉以降については、研究展開の可能性が小さくないと思われる。一七世紀初頭にアリー・パシャによって創られた伝統のその後を追究すべきであろう。

註

（1）Ibn al-ʻAjamī, *Mabāhij al-ikhwān wa manāhij al-khillān fī ḥawādith al-duhūr wa al-azmān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A 1631.［以下、*Mabāhij al-ikhwān*］

（2）エジプトの当該期を扱った以下のヒストリオグラフィーに関わる主な諸研究にも、この史料への言及は全くみられない。Peter Malcolm Holt, “Ottoman Egypt (1517–1798): An Account of Arabic Historical Sources”, in P. M. Holt (ed.), *Political and Social Change in Modern Egypt*, London: Oxford University Press, 1968, pp. 3–12; Laylā ʻAbd al-Laṭīf Aḥmad, *Dirāsāt fī taʼrīkh wa muʼarrikhī Miṣr wa al-Shām ibbāna al-ʻaṣr al-ʻUthmānī*, Cairo: Maktabat al-Khānjī, 1980; Daniel Crecelius, *Eighteenth Century Egypt: The Arabic Manuscript Sources*, Claremont: Regina Books, 1990; Daniel Crecelius and ʻAbd al-Wahhab Bakr, *Al-Damurdashi's Chronicle of Egypt, 1688–1755: Al-Durra al-musana fi akhbar al-Kinana*, Leiden: Brill, 1991; Nelly Hanna, “The Chronicles of Ottoman Egypt: History or Entertainment?”, in Hugh Kennedy (ed.), *The Historiography of Islamic Egypt* (*c. 950-1800*), Leiden: Brill, 2001, pp. 237–250; Nāṣir ʻAbd Allāh ʻUthmān, *Qabla an yaʼtiya al-gharb: Al-Ḥaraka al-ʻilmiyya fī Miṣr fī al-qarn al-sābiʻ ʻashar*, Cairo: al-Maṭbaʻat Dār al-Kutub wa al-Wathāʼiq al-Qawmiyya, 2006; Adam Sabra, “‘The Second Ottoman Conquest of Egypt’: Rhetoric and Politics in Seventeenth Century Egyptian Historiography”, in Asad Q. Ahmed, Behnam Sadeghi, and Michael Bonner (ed.), *The Islamic Scholarly Tradition: Studies in History, Law, and Thought in Honor of Professor Michael Allan Cook*, Leiden: Brill, 2011, pp. 149–177. この動乱期には、エジプトで州の正規軍による種々の要求行動や反乱、アナトリアや北シリアでジェラーリー諸反乱が起こり、社会的な動揺が広がりをみせた。エジプトの軍隊反乱については Adam Sabra, “ ‘The Second Ottoman Conquest of Egypt’”; Michael Winter, “Ottoman Egypt, 1525–1609”, M. W. Daly (ed.), *The Cambridge History of Egypt*, vol. 2: *Modern Egypt from 1517 to the End of the Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998, pp. 17–20; Peter Malcolm Holt, *Studies in the History of the Near East*, London: Frank Cass, 1973, pp. 179–180 を、ジェラーリー諸反乱については William J. Griswold, *The Great Anatolian Rebellion, 1000–1020/1591–1611*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 1983; Karen Barkey, *Bandits and Bureaucrats: The Ottoman Route to State Centralization*,

Ithaca: Cornell University Press, 1994; Özel, Oktay, “The Reign of Violence: the Celalis c.1550–1700”, in Christine Woodhead (ed.), *The Ottoman World*, London: Routledge, 2012, pp. 184–202 を参照のこと。

（3） Ibn al-ʻAjamī, *Taʼrīkh āl ʻUthmān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A 1632.［以下、*Dhayl mabāhij al-ikhwān*］イブン・アジャミーは続篇において『マバーヒジュ』を「第一巻」と呼んでいる（*Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 6r.）。それに則していえば、続篇は「第二巻」ということになろう。この一連の史書の内容構成の詳細や史料的性格、同時代のアラビア語の伝記集に取り上げられていない著者イブン・アジャミーの人物史や人的ネットワークなどについては、現在準備中の別稿において詳論することにしたい。

（4） 歴史叙述に注力した近世アラブ都市の「商工民知識人」という点において、イブン・アジャミーは、一八世紀ダマスクスの理髪業者（ḥallāq）の史家ブダイリーに比肩されよう。ブダイリーについては、日本で最初に注目し紹介した前嶋信次「浮世床史学――十八世紀シリアの珍籍」『史学』三三巻三号（一九五九年）、一二六―一三〇頁（後に『書物と旅 東西往還』（前嶋信次著作選第四巻、東洋文庫六八四）、平凡社、二〇〇一年所収）、そして、最新の研究である Dana Sajdi, *The Barber of Damascus: Nouveau Literacy in the Eighteenth-Century Ottoman Levant*, Redwood City: Stanford University Press, 2013 を参照のこと。

（5） Stanford J. Shaw, *The Financial and Administrative Organization and Development of Ottoman Egypt, 1517–1798*, Princeton: Princeton University Press, 1962, pp. 1–7; Laylā ʻAbd al-Laṭīf Aḥmad, *al-Idāra fī Miṣr fī al-ʻaṣr al-ʻUthmānī*, Cairo: Maṭbaʻat Jāmiʻat ʻAyn Shams, 1978; André Raymond, *Le Caire*, Paris: Fayard, 1993, pp. 195–197; Muḥammad al-Sayyid Maḥmūd, *Miṣr fī al-ʻaṣr al-ʻUthmānī fī al-qarn al-sādis ʻashar: Dirāsa wathāʼiqiyya fī al-nuẓum al-idāriyya wa al-askariyya wa al-māliyya wa al-qaḍāʼiyya*, Cairo: Maktabat Madbūlī, 1997; Jane Hathaway and Karl Barbir, *The Arab Lands under Ottoman Rule, 1516–1800*, London: Routeldge, 2014, pp. 48–56 など。

（6） Michael Winter, *Egyptian Society under Ottoman Rule, 1517–1798*, London: Routledge, 1992, pp. 31–36; Doris Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule: Institutions, Waqf and Architecture in Cairo (16the and 17th Centuries)*, Leiden: Brill, 1994, pp. 49–60. なお、個々の州総督の建設活動とワクフに関する研究については、Gerd Winkelhane and Klaus Schwarz, *Der Osmanische Statthalter Iskender Pascha (gest. 1571) und seine Stiftungen in Ägypten und am Bosporus*, Bamberg: Aku, 1985 をはじめとして枚挙に暇がない。

（7） *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 22r. ボスニア出身の彼は、オスマン朝の中心域ではヤヴズ・マルコチ・アリ・パシャ Yavuz Malkoç Ali Paşa と呼ばれ、エジプト州総督を退

任した後に大宰相の位にまで上り詰めることになった。大宰相就任までの経緯については、Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, pp. 45–46を参照のこと。なお、同時代の史家イスハーキーはエジプト州総督に着任した日付を同年第二月九日／八月九日としている（Al-Isḥāqī al-Munūfī, *Kitāb akhbār al-uwal fī man taṣarrafa fī Miṣr min arbāb al-duwal*, Cairo, 1276 A. H. [以下、*Akhbār al-uwal*], p. 342.）。他方、バクリー（一六五〇年没）は着任月を同年第二月とのみ記し、退任日についてはイブン・アジャミーと同じ日を記している（Ibn Abī al-Surūr al-Bakrī, *al-Minaḥ al-raḥmāniyya fī ta'rīkh al-dawla al-'Uthmāniyya* , Damascus: Dār al-Bashā'ir, 1995 [以下、*al-Minaḥ al-raḥmāniyya*], p. 275; Id., *al-Nuzha al-zahiyya fī dhikr wulāt Miṣr wa al-Qāhira al-mu'izziyya*, Cairo: al-'Arabī li-al-Nashr wa al-Tawzī', 1998 [以下、*al-Nuzha al-zahiyya*], p. 174.）。

（8）　*Mabāhij al-ikhwān*, fols. 71v–72r.

（9）　*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 108r.

（10）　*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 108r. この部分の記事にはバター油、胡麻油、胡麻ペースト（ṭaḥīna）、ソラ豆、パンなどの当時の価格も示されている。

（11）　*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 110r. 前年の一〇〇九年／一六〇〇年晩夏におけるナイルの最高水位は二〇ズィラーウ一二イスバウであった（*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 89r.）。

（12）　*Mabāhij al-ikhwān*, fols. 72v–73r. 大小カラーフアに連なるモカッタム山という空間の聖なる性格については、大稔哲也「エジプト死者の街と聖墓参詣――ムスリムと非ムスリムのエジプト社会史」山川出版社、二〇一八年の特に一八一―一四頁を、モカッタム山中のシュユーシー・モスク（廟）の場の聖性については Yusuf Ragib, "Un oratoire fatimide au sommet du Muqattam", *Studia Islamica* no. 65 (1987), pp. 51–67及び Fumihiko Hasebe, "Invocations from the Tops of Minarets: A Popular Uprising and Its Aftermath in Ottoman Cairo, November 1724", *The Memoir of Toyo Bunko*, No. 63 (2005), pp. 95–96を参照されたい。また、マムルーク朝期の支配層のカラーフアに対する関与の実態については、東のサファラー地区、南のラサドやアーサール・ナバウィーヤ（預言者聖遺物保管所）を舞台とした祈願式の主導を含めて、大稔前掲書、一八三―一八七頁に詳論されている。

（13）　大稔前掲書、一二二頁及び一八六頁。

（14）　*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 73r.

（15）　Michel Tuchscherer, "Coffee and coffeehouses, Ottoman", *Encyclopaedia of Islam*, the 3rd edition.

（16）　*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 73r. 約一一メートルの高さの囲壁をもち、二つの構築物から成るシュワン・スルターニーヤ（別名シュワン・アーミラ、或いはアンバール・アーミレ）については、Shaw, *The Financial and Administrative Organization and Development of Ottoman Egypt*, pp. 349–350; Crecelius and Bakr, *Al-Damurdashi's Chronicle of Egypt*, p. 81を参照のこと。

（17）　*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 74r.

(18) エジプトの中では降雨量の比較的多いアレクサンドリアでも、オスマン朝期には、ナースィル運河を通じてもたらされる氾濫期のナイルの新鮮な水が市内の八四箇所に及ぶ貯水所に備蓄されていた。詳しくはフサーム・ムハンマド・アブドゥル＝ムウティー（太田（塚田）絵里奈訳）「オスマン朝時代のアレクサンドリア――九二三～一二二三／一五一七～一七九八年」拙編『ナイル・デルタの環境と文明』II、早稲田大学イスラーム地域研究機構、二〇一三年、一一八―一一九頁を参照せよ。

(19) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 75r. その際にイスラーム教徒たちの遺骸が出土したことも記されている。

(20) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 75v. シャーフィイー廟について大稔哲也はライス廟と共に「カラーファの象徴的中心」をなすものとみている（大稔前掲書、一七一―一七二頁）。シャーフィイー廟の発展過程については、大稔前掲書、一四三―一四五頁を参照のこと。また、一七二四年のカイロの民衆蜂起においては、この二つの聖廟、ジュユーシー・モスクなどは敗走者たちのアジールとしての役割を果たした（Hasebe, "Invocations from the Tops of Minarets", pp. 95-96.）。なお、ベーレンス＝アブーセイフは、アリー・パシャの唯一の建造物として「シャーフィイー廟の給水所（sabīl）」を挙げるが（Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, p. 180）、ここでの貯水池との関係は不明である。

(21) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 75v.

(22) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 111r.

(23) 児童の教師については、マムルーク朝期に関する事例研究ではあるが、拙稿「中世後期アラブ地域における複合宗教施設の教育機能―カイロのハサン学院の場合」山本正身編『アジアにおける「知の伝達」の伝統と系譜』慶應義塾大学言語文化研究所、二〇一二年、二八四―二八五頁を参照されたい。

(24) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 111r.

(25) 一段高く位置する大平面であったことは、『マバーヒジュ』続篇の記事（*Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 53r.）によっても裏付けられる。さらに同記事によれば、説教壇も石造りであり、そこにはドーム状の小屋根が取り付けられていたという。なお、アリー・パシャのエジプト州総督としての治績に関してはオスマン語の韻文作品が存在し、同書のスレイマニイェ図書館所蔵の写本には、この礼拝所での祈願式を描いたとおぼしき細密画が挿入されている。Kelâmî-i Rûmî, *Vekyi'-i Ali Paşa*, İstanbul: Çamlıca, 2012, tıpkıbasım, fol. 32b を参照のこと。ちなみに、こうした開放型の礼拝所で想起されるのは、ファーティマ朝が建設し、イスマーイール派の儀礼の場として活用したナスル門外の礼拝所（musallā）である。それはイフリーキヤ時代の首都マフディーヤの市壁外の礼拝所の流れを汲み、「象徴的な戦場」としての性格も帯びていた。詳しくは Paula Sanders, *Ritual, Politics, and the City in Fatimid Cairo*, Albany: State University of New York, 1994, pp. 45-51, 67-69 を参照せよ。また、この礼拝所と、中世にシャーフィイー廟周辺に所在した「イブ

ン・アルスフィー析禱所（Muṣallā Ibn al-Arsfī）」（大稔前掲書、一四四頁）との関係も今後の検討課題といえよう。

(26) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 111r.

(27) ザイヌルアービディーンに関しては、その子アフマドが著した同教団の系譜的著作について論じたAdam Sabra, “Autobiography and Family History in Seventeenth-Century Egypt: Ahmad ibn Zayn al-ʻAbidin’s Qalaid al-minan wa faraid al-zaman”, in Nāṣir Aḥmad Ibrāhīm ed., *Jadal al-mawḍūʻiyya wa al-dhātiyya fī kitābat taʼrīkh Miṣr: Dirāsāt muhdāt ilā al-muʼarrikha al-kabīra Nillī Ḥannā*, Cairo: al-Hayʼa al-Miṣriyya al-ʻĀmma li-al-Kitāb, 2012, pp. 46–72及びAl-Ghazzī, *Luṭf al-samar wa qaṭf al-thamar min tarājim aʻyān al-ṭabaqa al-ūlā min al-qarn al-ḥādī ʻashar*, 2vols., Damascus: Wizārat al-Thaqāfa wa al-Irshād al-Qawmī, 1981–1982, vol. 2, pp. 551–553を参照のこと。

(28) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 111r.

(29) 以上、*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 75v. なお、『マバーヒジュ』のヒジュラ暦一〇一〇年に関する記事は分断された形で三か所に示されており、ここでの記述は先の第四月の祈願式に関する記述よりも前に位置している。一〇一一年／一六〇二年以降について年代記記事は時系列的に進み安定的様相を呈するが、一〇〇〇年／一五九一－九二年から一〇一〇年／一六〇一年の期間を扱う記述は必ずしも時間軸に沿って示されているわけではない。

(30) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 86v.

(31) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 87r. イブン・アジャッラー自身が二人の息子をこの流行で失ったことも一行付記されている。

(32) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 91v-93v.

(33) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 93v.

(34) 同時代史料では、イスハーキーの年代記がアリー・パシャの任期中にベスト（ṭāʻūn）が町村に蔓延して死者を出したことを伝えるが、具体性に欠け、開始時期についても言及していない（*Akhbār al-uwal*, p. 350.）。バクリーも開始時期については触れず、ベスト流行がエジプト全土に広がったこと、カイロのナスル門の礼拝所で一日三〇〇人以上の葬儀があったことを伝えている（*al-Nuzha al-zahiyya*, pp. 174–175.）。

(35) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 125v.

(36) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 126r.

(37) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 126v, 193v-194r.

(38) スーフィーのエジプト州総督はこの他に少なくとも二名は存在した。Winter, *Egyptian Society under Ottoman Rule*, p. 35を参照のこと。

(39) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 134r. 着任日をイスハーキーは同年第一二月二二日／五月二二日とし（*Akhbār al-uwal*, p. 351）、バクリーは同年第一二月四日／五月四日としている（*al-Minaḥ al-raḥmāniyya*, p. 291; *al-Nuzha al-zahiyya*, p. 177.）。

(40) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 145; *Akhbār al-uwal*, p. 354.

(41) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 25v, 146r. イスハーキーは着任日をダミエッタ港に到着した一〇一三年第七月七日、退任日を一〇一四年第三月二日とし、Jurjī Muḥammad Bāshā al-Khādim と呼んでいる（*Akhbār al-uwal*, p. 356.）。他方、バクリーは着任日を一〇一三年第七月三〇日、退任日を一〇一四年第二月二九日としている（*al-Minaḥ al-raḥmāniyya*, p. 296; *al-Nuzha al-zahiyya*, p. 179.）。

(42) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 153.

(43) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 154r.

(44) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 169. イスハーキーは着任日を第三月三日としている（*Akhbār al-uwal*, p. 356.）。

(45) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 26r. イスハーキーは退任日を第二月四日としている（*Akhbār al-uwal*, p. 356.）。

(46) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 188v.

(47) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 188v. アフメト一世期の対外戦争についての全体的な見取り図は、Christoph K. Neumann, “Political and Diplomatic Developments” in *The Cambridge History of Turkey*, vol. 3, Cambridge: Cambridge University Press, 2006, pp. 45–47 から得られる。

(48) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 189r.

(49) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 194.

(50) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 194v. 儀礼の現場への州総督の参加は史料に確認されない。なお、中世エジプトの王権が自ら犠牲儀礼を執行した例ついては、マムルーク朝後期に関する拙稿「ムアイヤド王と狀況儀礼」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』二五号（一九九三年）、一三一―一四二頁を参照されたい。

(51) クル・クラン・メフメト・パシャの任期に関しては、Sabra, “The Second Ottoman Conquest of Egypt” が研究の現在の到達点を示すものだが、そこでも利用されていない『マバーヒジュ』とその続篇は、この州総督の支配の問題点に関する度々の批判的言及など独自の関連情報を豊かに湛えている。その精細な検討は当該期エジプトの政治・社会像の再構築を促すことになるだろう。

(52) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 26, 230v–231r. イスハーキーは着任日を一〇一六年第二月五日／一六〇七年六月一日、カイロからの出発を一〇二〇年第六月一二日とし（*Akhbār al-uwal*, pp. 356, 359）、バクリーは着任日を一〇一六年第二月七日、退任日を一〇二〇年第六月一八日としている（*al-Minaḥ al-raḥmāniyya*, p. 300; *al-Nuzha al-zahiyya*, p. 181.）。

(53) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 52v.

(54) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 52v. その後、異例の遅れではあったが、ナイル川は同年第六月一日／一六〇九年九月一日に漸く一六ズィラーウの満水に達し、ナイロメーター（miqyās）に垂れ幕が掛けられ、人々が歓喜したという（*Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 53v.）。

(55) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 52v. マムルーク朝期のスーフィー聖者のシャムスッディーン・ハナフィー（一四四三年歿）については、Al-Shaʿrānī, *al-Ṭabaqāt al-Kubrā*, Cairo: Dār al-Fikr al-ʿArabī, n.d., vol. 2, pp. 81–94; Michael Winter, *Egyptian Society under Ottoman Rule,*

1517–1798, London: Routledge, 1992, p. 131を参照のこと。

(56) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 52v.「デイーワーンのカーディー」については不明である。エジプト州ハナフィー派主席カーディー（カーディー・アスカル）、或いはカイロ城の州総督府に勤務した法官を指すのかもしれない。

(57) サダカの対象としてのマクタブについては、拙稿「中世エジプト都市の救貧――マムルーク朝スルターンのマドラサを中心に」五〇―五二頁、及び拙稿「中世後期アラブ地域における複合宗教施設の教育機能」二八―一一八七頁を参照されたい。

(58) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 53r.「アルティー・バルマク」はバルカン半島のユスキュプ（スコピエ）に生まれ、その地でバイラミーヤ教団に属し、イスタンブルで高等教育に携わり、晩年にカイロで民間説教師として活動したアルトゥ・パルマク Altı Parmak（一〇三三年／一六二三・二四年歿）のことであろう（Al-Muḥibbī, *Khulāṣat al-athar fī a'yān al-qarn al-ḥādī 'ashar*, 4vols., Beirut: Dār Ṣādir, n.d., vol. 4, p. 174; J. Schacht, "Altı Parmak", *Encyclopaedia of Islam*, the 2nd edition.)。なお、カイロ旧市街のスーク・スィラーフ地区のガンドゥール通りには一七一一年竣工のアルティー・バルマク・モスクが現存する（Caroline Williams, *Islamic Monuments in Cairo: The Practical Guide*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2008, pp. 93–94.）

(59) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 53r. そして、この祈願式の後にクル・クラン・メフメト・パシャは更なる慈善行為として私費を投じ、カイロのラフバ監獄 Ḥabs al-Raḥba とダイラム監獄 Ḥabs al-Daylam から囚人（債務入獄者）を釈放するように命じた（*Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 53r.）。

(60) Behrens-Abouseif, *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, p. 58.